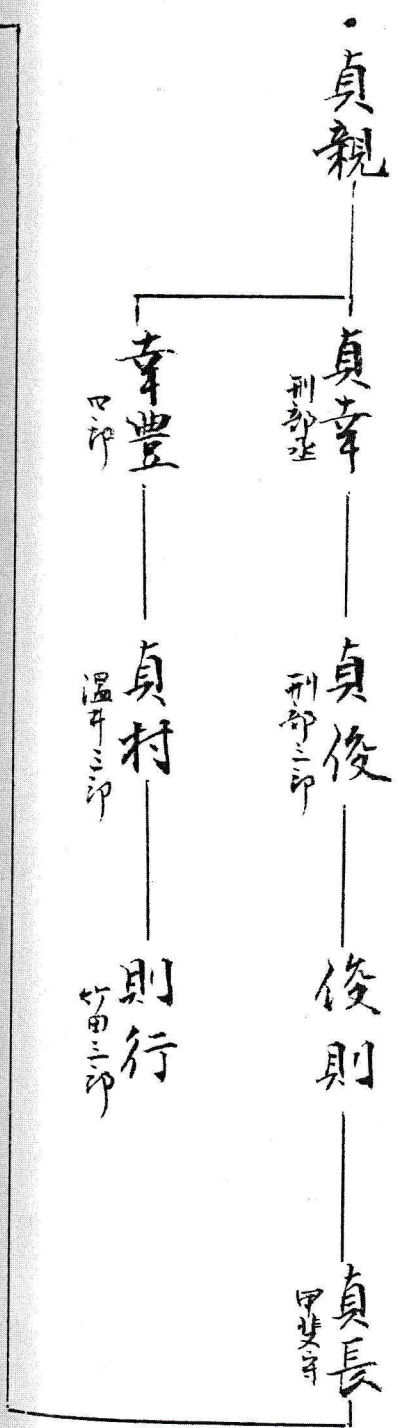


目次	頁
一、春日の氏称とその概要	三
二、上代の春日氏と春日真人	十一
三、春日神社とその神官	二十三
四、藤原姓春日氏諸流	二十九
五、清和源氏流春日氏	四十六
六、宇多源氏流春日氏	五十二
七、村上源氏流春日氏	六十一
八、信州滋野姓春日氏	六十九
九、諸国の春日氏	七十九

「公武業枯物語」には、貞幸が新謀を以て北條泰時の危急を救い、恩賞として上野国に七十余町の所領を賜うと伝へたり。此の子孫、信州佐久の春日城に住し左の系を傳へたり。



繁貞
越後守

貞經
甲斐守

景貞
大隅守

清義
刑部大輔

宗貞
伊豆守、文明年中の人

貞秋
刑部少輔

貞廣
大隅守

熊磨

永正十三年、春日大隅守貞廣は村上頼平に款を通じて望月一党と戦ひしが、敗れし後、甲州に奔るといふ。

これより先、應永年中に、右の春日氏の
 分れ伊那郡にあり、世々高遠の諏訪一族に
 属す。天正中、仁科信盛の輩下に、春日河
 内守昌吉あり、武田氏と共に滅ぶ。
 片桐村にも春日氏あり、小笠原秀政の家臣
 春日淡路守は、五百石を領せしも、寛永元
 年の水害によりて転居すと。
 筑摩郡、水内郡にも春日氏あり、此の国の
 春日氏につきては、あつた、後章、諸国の春日
 氏の項に記す。

甲州に逃れたる大隅貞廣は伊海に佐す。

その子を源五郎といひ、武田氏に仕えて弾

正忠昌信と名来る。或は昌宣、晴昌、晴久

とも記す。

「甲陽軍鑑」には、永祿四年高坂氏の跡を

賜うとあるも、以後変るゝとなく春日氏を

稱し、春日弾正忠、春日中務少輔の名、諸

書に見ゆ。

昌信はしばらくありて信州海津の城主とな

り、下関庄村明德寺に、弾正夫婦の石塔あ

り。昌信の養子と春日宗次郎昌元といふ、
沼津城と守るといふ。(関八州古戦録)

安土及京師。織田家譜、軍記從抵界浦。會信長之變至。梅雪性素猜忌。見宮當難。內不自安。由枚方至普賢谷。山城告別。欲取便路。奔甲斐。從者或斬鄉導。奪其佩刀銀鐔。會土民群起。阻撓道路。脫走草內邑。遂爲土寇所殺。鹽尻志、法名月山。號大龍寺。穴山村。備福寺。碑銘。國志。泉寺古。梅雪每好異。紙衣彩畫。蛭子大黑天像。表著來往街衢。國志、軍鑑子信治。字勝千代。幼稚在下山。梅雪遇殺而後。削髮河食邑。領河內邑耳。家人穗坂常陸。有泉大學。每爲陣代。天正十五年六月。患痘而死。無後。國志、

高坂昌信。大三川志及諸書作昌。宣或時昌。武德編年集。成作晴久。紀州高野山。成慶院。元龜二年。山縣昌景。香坂彈正左衛門虎綱連。署荻生茂卿。可成。諱亦載之列祖。成續亦同。今從明德寺說。世信濃土豪。昌信實甲斐人。伊澤豪戶春日大隅子也。國史、軍鑑初字源五郎。幼而喪姑。與姊夫爭父遺田。訟獄而不利。遂亡命。時年十六。信玄嘉其姿美。召仕。不歷三旬。擢爲近侍。舉止渾出人意之表。以賤踰貴。傍人媚嫉。指摘不少。然昌信不敢蕩意。取以爲戒。戰競不怠。惕勵益勤。在師中爲斥候。數有功。寵遇日渥。國史、軍鑑天文二十一年。擢爲士隊長。統一百騎。又加五十騎。國史、軍鑑明年。出爲小諸城代。國志、勝弘治二年。小山田

「お起こし致しましょうか」

「いや」

春日大隅は首を振った。

「お疲れの様子、暫く、そのままに」

「でも、お控えになってから、もはや一刻（二十時間）ほどに……」

「構いません……」

大隅は陽焼けた顔に微笑を浮かべた。

「大隅か……」

このとき、信虎は眼を開けると、起き上がりざま両肢を伸ばして、深々と大あくびをした。

「お休みのところを」

大隅が恐縮したように両手を突いた。

「首尾は……」

信虎は大隅を見据えるように言った。

「棟綱は心を決めたようにございます」

「そうか」

信虎は満足気にうなずいた。

信虎は信州の諏訪頼満と前年、信濃神戸、境川の戦で敗れている。ここ数年のあいだに甲斐の土豪は一応その麾下におさめたが、なんとしても層が薄い。それで、諸国から武勇智略に秀でた者を召し抱えようと、腹心の家人を諸国に密かに派遣していた。

海野棟綱を召し抱えようと春日大隅に接触させたのもその一つである。

棟綱は北信濃の滋野一族で、その子幸隆ともども、智略の将として名が高い。

「もう一人の方はどうだ」

信虎は大胡座をかいて、大隅の顔をみつめた。

「ひと足、遅かったようです」

「槍鬼堂、諸羽一堂は駄目か」

「はい……すでに、今川麾下の葛山氏元に臣属しております」

「今川麾下に……」

信虎の顔が陰しくなった。

「なんとかならぬのか、大隅」

「はあ」

大隅は困惑を浮かべた。今川家は武田家にとっては当面の敵だ。ほしい豪勇の士を敵方にとられたのだ。

「すぐに掛け合え、なんとしても槍鬼堂はほしいのだ」

「一堂は今、果たし合いに備えております。暫く、ご猶予を……」

「果たし合い……ほう」

信虎が興味をみせた。

春日大隅は樋口新八ら七人組と一堂との安倍川の決闘の模様を話した。大隅は武家ではない。石和宿に住む豪農であり、一方では諸国物産の商人でもある。一堂に接触するため、駿河に入っ